教職員のおすすめ図書
SEASON 3
vol.2

我が家で一番古い本

『増補 難波戦記』

編集人 不詳　栄泉社 1883年発行

募集広報部　橋本 光央
インタビュアー　司書教諭　角井 貴乃

明治の講談本『難波戦記』を手に 失われた「気概」と物語の熱を追う

放課後の光がやわらかく差し込む一室。机に広げられたのは、百四十余年の時を超え、墨の香りをかすかに放つ二冊の古書。持ち主は、小説家でありエッセイスト、そして普段は本校の募集担当として大阪中を飛び回る橋本さんだ。多忙な業務の傍ら、なぜ彼は物語を紡ぎ、そして古い本に惹かれるのか。その一冊から解き明かされる、芸と、歴史と、そして現代に生きる私たちへの、熱いメッセージに耳を傾けた。

【橋本】 橋本と申します。よろしくお願いいたします。今回は、このような企画に参加させていただきましてありがとうございます。

【角井】 こちらこそありがとうございます。橋本さんは、普段は募集広報部にいらっしゃって、中学・高校の生徒募集を担当されています。

【橋本】 校内にいるんですが、生徒たちにはあまり顔を知られていない人間です。

【角井】 だけど、実は作家でもいらっしゃって、図書館には橋本さんが書かれた書籍がいくつかあります。たまに、橋本さんの作品が貸し出されるのを確認しています。先日は『どうして勉強するの』という本が貸し出されていましたよ。

【橋本】 それは嬉しいですね。

【角井】 今回は『難波戦記』と言う講談本をご紹介いただきます。本の内容に入る前に、説明が必要かなと思うので、まずは講談についてどういうものかに触れておきましょうか。私の解釈は、講談は「読み聞かせ」で落語は「演じるもの」だというイメージです。落語は話し手が体の動きを変えることでキャラクターを演じ分けます。例えば、前を向いているときはナレーション、左を向いているときは和尚さん、右を向いているときは小坊主…といった具

合です。一人芝居とでも言うのでしょうか。それに比べて講談は、読み聞かせなので、前を向いてひたすら話を語ります。ポイントは、話の最中に張り扇（はりせん）で台をリズミカルに叩くことです。

【橋本】 イメージはそうですね。付け加えるとすれば歴史も違います。大衆の演芸として人気を博したのは、落語の方が古いですね。だいたい1700年くらいに、大阪であれば上方落語の祖と言われている米沢彦八が大人気となります。当時の小説『曾根崎心中』にも出てくるところからも、その人気ぶりがうかがえます。辻咄（つじばなし）といって、大通りに床几（しょうぎ）という折りたたみいすを置いて話す、現在でいうところの大道芸から人気者になったそうです。今でも生國魂神社で「彦八まつり」という上方落語の感謝祭が催されていますよ。

講談という文芸は、この後の時代から明治期に流行します。講談は歴史モノ…特に戦の武勇伝などがテーマとしては多いですね。持ってきた本以外にも、太平記や水戸黄門も講談が元です。「べべンベン」と小気味いいリズムを奏でながら、畳みかけるような話し方をするので、落語とはまた聞き心地が違います。何を言っているのか分からない人でも、リズムが気持ちよくて通った人もいたのではないでしょうか。ともかく大流行しまして、どのくらいかというと、大阪では町内ごとに講談小屋があったというくらいです。

【角井】 大人気じゃないですか。

【橋本】 そうですよ。それから、講談ってのいうは長いんですよ。下手すると1年かけて一つの話をしてるんです。それを毎日、続きが気になるところで終わるわけです。

【角井】 あー。明日も行きたくなると。TVドラマみたいですね。

【橋本】 そうですね。そして、流行したらどうなったかというと、話している内容を速記して本にする人がでてきたんですね。これがまた、べらぼうに売れたわけです。その後、速記ではなく書き講談本といって、もう少し捏ねた内容の講談本がでてきます。これが明治頃ですかね。私が今持っているこの本が、明治16年（1883年）6月22日発行と書いていますから、書き講談本に相当するのかなと。

【角井】 明治16年の本が今ここにあるわけですか。ロマンですね。ちなみに、私は明治22年発行の絵本版同著を上田市の博物館がデジタル公開してくれているので、読んでから今日この日を迎えましたよ。これを読んでくださっている方も、よろしければぜひ、「繪本難波戦記読み下し」で検索してみてください。

さて、大体どんな位置づけの本か分かったところで、本の内容に入っていきたいなと思います。本のタイトル『難波戦記』ですが、私の理解では、「真田幸村」という表現がでた最初の本、ですよね？

【橋本】 そうですよ。十勇士と同じ感じで、真田幸村の「幸村」はこの本からと言われていて、本名は「信繁」です。ざっくりと申しますと、大坂の陣を舞台に、真田幸村が徳川家康をあと一歩のところまで追いつめる…という内容ですね。出てくる名前が全部、大御所なんです。皆さんもご存じの武将がたくさん出てきます。

【角井】 この本の魅力はどんなところですか？

【橋本】当時の仮名遣いと、内容が無いところでしょうか。

【角井】内容が無い!? あ、なるほど。戦記だから、とつとつと戦の様子が語られているということですか？

【橋本】そうです。戦の様子ならまだしも、途中、出てくる武将の名前が延々と羅列されるところがあるんですよ。ほら、ここ。これ全部名前ですよ。ここが講談らしさなんです。講談師さんはこれを張り扇でリズムを刻みながら聴かせてくれるわけです。

【角井】うーん。でも読むとなると。

【橋本】まあ、しんどいですね（笑）。

【角井】そしてもう一つの魅力、仮名遣いですね。

【橋本】そう。明治時代の本を読んでいてちょっと面白いのは古い仮名遣いです。「ゐ」とか「ゑ」とかだけではない変体仮名で書かれているので、最初はわかりませんでした。それが、読んでいたらだんだん読めるようになってきて面白くなってきたんですよね。

【変体仮名（平仮名）例】

あ	あ	元となった漢字 安	安	元となった漢字 愛	愛	元となった漢字 阿	阿	元となった漢字 惡	惡		
か	か	元となった漢字 佳	佳	元となった漢字 加	加	元となった漢字 可	可	元となった漢字 可	可	元となった漢字 須	須	元となった漢字 嘉	嘉
す	す	元となった漢字 受	受	元となった漢字 壽	壽	元となった漢字 春	春	元となった漢字 春	春	元となった漢字 須	須	元となった漢字 須	須
な	な	元となった漢字 南	南	元となった漢字 名	名	元となった漢字 奈	奈	元となった漢字 奈	奈	元となった漢字 那	那	元となった漢字 那	那
は	は	元となった漢字 八	八	元となった漢字 半	半	元となった漢字 婆	婆	元となった漢字 波	波	元となった漢字 盤	盤	元となった漢字 葉	葉
む	む	元となった漢字 武	武	元となった漢字 無	無	元となった漢字 牟	牟	元となった漢字 舞	舞	元となった漢字 无	无	元となった漢字 无	无
る	る	元となった漢字 流	流	元となった漢字 留	留	元となった漢字 留	留	元となった漢字 留	留				

明治 33 年（1900 年）に実施された「小学校令」により初めて平仮名および片仮名は統一された。それまでは上の表の通り、同じ「あ」を意味する文字でも、多種多様な平仮名（変体仮名）が存在した。

【角井】でも、こんなに古い本をどちらで手に入れたられたのですか？

【橋本】知り合いの講談師さんにいただいたんです。もともと私が好きだったのは落語なんですよ。通っていた中学校の向かいに寄席小屋がありまして。月1回、当時４００円で入れたんです。それからずっと落語が好きだったんですけども、寄席は落語以外にも講談や浪曲もかかりますからね、親しみはありました。そんな中、最近ある講談師さんと仲良くなりまして、「講談にも興味がわいてきた」と、その方にお話したら、この本をくださったんですよ。実は、今読んでいる最中でして。通勤の電車で読んでいます。ショートショート等を書いている者としても、話し口調で進行していく講談本は、リズムや間の取り方という点で勉強になります。

【角井】電車の中で!? 和綴じ本を電車の中で読んでいる人がいたら、近くの人が驚くでしょうね。それにしても、１４０年以上も前の本なのに保存状態がいいですね。和綴じ本だから、糸が切れたらバラバラになりますけど、保ってますし。中身も表紙もきれいです。

【橋本】糸はともかく、紙が和紙ですから。茶色くな

りにくいんですよね。表紙は版画かなあ。

【角井】 中身は活版印刷ですね。昔の印刷技術で、金属でできた文字のハンコを、地道に並べて刷るという気の遠くなる作業がなされている。大枝公園の近くにもまだアトリエがありますね。

【橋本】 皆さんご存じの講談社という出版社も、社名は講談に由来しています。もとは「講談倶楽部」という雑誌を出していたんです。

あ、そうでした。講談といえばここを忘れちゃいけません。大阪の出版社で立川文明堂ってところがありましてね。そこは「立川文庫」っていうシリーズで、講談本ばかり出版していたんです。今日、一冊持ってきましたよ。

『真田三勇士 忍術之名人 猿飛佐助』
編者 佛山樓主人　立川文明堂 1914 年発行

【角井】 おお！本物を初めてみました。当時の少年たちのバイブル。そして真田幸村の家臣として知られる猿飛佐助などの「真田十勇士」も立川文庫から生まれたとか。十勇士って史実にはいないんでしたよね？講談人気とともに作られたキャラクターだとか。

【橋本】 そうです。みんな貸本屋で一生懸命に立川文庫を読み漁っていたわけです。立川文庫は書き講談本ですが、英雄が多く取り上げられているので、当時の少年たちの心を鷲掴みにしたんでしょう。

【角井】 江戸時代から、子供たちは英雄の浮世絵が好きですもんね。それが物語になったようなものですから大好きでしょう。それにしても付け足しで作られたキャラクターがこんなに後世にも残って実在の人物顔しているなんて面白いですね。

【橋本】 立川文庫の面白さはそれだけではないんです。出版形態としても面白くて。そもそも、書き講談というものは、講談師が書き手に講談のネタを提供して、話し言葉で書かれたものなんですけど、これの最初が立川文庫なんです。そして形も小さい。袖珍本（ちゅうちんぼん）とか袂本（たもとぼん）とかいいます。当時東京で流行っていた装幀の文庫本（現在の文庫本の半分の大きさ）シリーズのデザインをまねているんです。

【角井】 今と違って鞄を持つ人が少なかったでしょうし、着物の袖である袂に入るサイズが手軽だったんでしょうね。

真田幸村と十勇士とか、南総里見八犬伝とかって、現代においても、ゲームやアニメとかになって、生徒は知ってるキャラクターじゃないですか。いろんなものに影響を与えていますし。結局、みんなこの手の話好きですよね。時代に関係なく。

【橋本】 私の子供のときには、ＮＨＫで南総里見八犬伝を基にした人形劇『新八犬伝』が放送されていました。これが大人気で、これを見ないで次の日小学校に行くと、話に入れなくて（笑）。必死になって観てましたね。

【角井】 リーダーの元に何人か揃う強い人の集まりみたいなのって好きじゃないですか。それぞれにバックボーンもあって。大きな敵の前に力を合わせて頑張るぞ！みたいな。『鬼滅の刃』の柱がそれですよね。口上言いながら戦うのとか、もろに八犬伝ですし。八犬伝と十勇士はもはや週刊少年ジャンプなんですよ。

ところで、これに目覚めて、橋本さんは古い本とか集めに入るとかはないんですか？

【橋本】実家が残っていたら古い本がたくさんあったんですが…。貴重な本ばかりですし、集めるとなると、お金がいくらあっても足りませんよ（笑）。

【角井】でも、本がたくさんあったということは、お祖父様が収集されていたとか？

【橋本】祖父は読書に興味はあったのかな。満州（現在の中国東北部）でマッチ工場を作ったけど、経営に失敗して帰国したって話しか覚えてないな。

だけどね。昔の人ってね、大した準備もなく海外に飛び出す人がすごく多かったんですよ。ちょうど今日話した時代、明治のあたりの人は特にそのイメージがあります。志が強くて大きかったんでしょうね。だって何も…それこそ、英語なんか全くわからんのですから。向こうで、実地で学ぶわけですよ、志のためにね。でも、時代が過ぎて、次の世代になると、まず知識を学ぶようになる。それが3世や4世ってなって、今になると、海外に対する興味がすごく薄れてきてね。英語に対する、なんていうのかな、熱意っていうのかな…。それが薄れてきてるように感じます。

【角井】おっしゃったさっきの、明治時代の人々は多分、言語や知識を道具として認識しているから、できたんではないでしょうか。今は学んで知識を得ることが目的というか、ゴールみたいな感じになっていますけれども。例えば、橋本さんのお祖父様のように「事業を立ち上げて、ビジネスチャンスをつかむ」ことが目的であり、その成功がゴールだから、とりあえず現地に行くという行動につながったんじゃないでしょうか。だから、スキルを得たり、進路に挑戦するのも大事なのですけど、「なんのために？」と問うべきでしょうね。

【橋本】そういうことですよね。そういう気概が足りないのかな。気概の明治って言いますし。

【角井】でも、ちょうど夏ですし、やったことないからとか知らんからっていうのを脇によけておいて、とりあえずやってみる、飛び込んでみる経験をするにはいいタイミングかもしれませんね。

【橋本】そうですね。大阪国際の生徒のみんなには、知識が入ってそこで終わってしまうのではなく、自分の夢に向かって飛び込む勇気を持ってほしいです。